

好きこそものの上手なれ

回胴倒錯者

— PACHISLO FREAK —

今回から連載がスタートすることになった「回胴倒錯者」。自称「スロット異常者」が贈る、新感覚回胴界ドキュメント。10年以上にも及ぶ経験と現役設定師ならではの独自の視点で回胴界を赤裸々に告白。現在、過去、未来のスロット業界の表情、展望を大いに語っていたらどう思う。現在のスロッター達の目には、彼の人生がどのように映るのだろうか。また、A氏の目には彼らの姿がどのように映っているのだろうか。

出発

慣れ親しんだ三重を離れる時、寂しさは微塵もなかった。都会の生活に憧れ、希望を抱く私には振り向くことよりも、眼前に広がる甘美な世界の方が魅力的に感じられたからだ。大阪の大学に進学が決まっていたから毎日バラ色で、引越しの前の晩は遠足待ちの子供の様にドキドキしてゆつくりと眠れなかった。

「ほな行つてくるわ」と、まるで買い物物でも行くかのような挨拶を両親と交わり、「きちんと生活できるのだろうか」という親の心配を露骨にも気にすることなく、18歳の青臭い少年を乗せた近鉄電車は一路、西を目指したのであった。

田舎モノには10階建てのビル(ビルと言うほどでもないが)ですら珍しく、まさに「上を向いて歩こう」状態の連続だった。私が借りた安普請のアパートは東淀川区と言うところであり、大阪の最も有名な繁華街の一つである梅田から4つ目の駅という都会を満喫するには絶好の場所だった。もちろん都会を満喫したかどうかは別問題であり、言ってしまうと大阪に8年も住んでいくに、プライベートで梅田・難波に行ったのは両

手で充分足りるくらいの回数でしかなかった。

出会い

大学へはバイクで通った。地元では考えられないくらい信号と車、そして自転車、バイクの数。人に酔うという感覚を初めて覚えたのはこの頃だったように思う。加速・減速の繰り返して当然のように燃費が悪くなり、その些細なガソリン代でさえ貧乏学生の懐には大きな打撃を与えていた。どんなに貧乏していても時は流れていく。爪に火を灯すような生活をしていても時間は過ぎていく。そしてもちろん腹が減る。働く事が嫌いだっただけはアルバイトもせず、親からの仕送りを頼りに生活しながら貧乏は貧乏なりに苦肉の策でその場を凌いでいた。そう、それはキャンブルである。実際はそのキャンブルが生活を圧迫し、私の困窮の一番の原因だったかもしれない。

大学で出来た友人たちと麻雀に励み、授業中もトランプ・花札等でキャンブル三昧。落ちこぼれ学生の代表、そんな毎日を送っていた。そしてなんでも賭け事にしていった。勝つても負けてもそれが文句の一つも言わないこと、仲間が悪くなることもケンカすることもなく、和気藹々とキャンブルに明け暮れていた。そういう仲間であったからこそ当然のようにギャンブルの会話も弾んだ。麻雀・パチンコ・競馬・自分達で考えたオリジナルの賭け事など。お互いの意見を出し合い、常にそれらのギャンブルを極めるために日々研鑽していた。ただその時、唯一ついでにいな

い会話があった。それがこのコラムの主題かつ主役の「スロット(パチスロ)」である。

困惑

三重県出身(三重県は当時、スロットの無い唯一の都道府県だった)の私は、スロットと言うものを見た事がなかった。スロットと言えは「アメリカのカジノ」にあるモノ」というくらいにしか思っていなかった。友人たちの話を聞けば聞くほどギャンブル好きの血が騒ぎ、スロットをしてみたくて仕方がなかった。来月、仕送りが入ったら絶対打ってみようと思いに決めたのだ。季節は春から夏に変わろうとしていた。

仕送りの中から家賃・光熱費等の必要最低限の支払いを終え、残った分(食費・交際費)を握り締め、大学近くの商店街にあるパチンコ屋に入った。M店はパチンコ150台程度、スロット40台程度のこぢんまりとした店である。稼働は1割程度。ハッキリ言ってガラガラである。今思い出すと、慣れない雰囲気におどおどしながらも初心者では精一杯だった気がする。初心者とバレた瞬間に常連や上手い人間にカモにされるのではないかと勝手に想像していたからである。こんなことなら周りの詳しい友達に付いてきてもらえばよかったとも思ったが、負けず嫌いな私は、人知れずこっそり練習して友達の前を明か



●スーパープラネット(山佐) 多摩川沿いの美観地区にあり、パチスロ愛好者の目撃情報も豊富にある。ボーナス成立をいかに多く見抜くか、それが勝負の鍵となる。

してやろうと画策していたのだ。スロットの島を覗いてみると45人のおばさんが黙々と遊技中だった。設置機種は詳しく覚えていないが、山佐産業の「スーパープラネット(惑星がモチーフ)」と「ニューバルサー(カエルがモチーフ)」が設置されていたのは記憶にある。この2機種にしかお客さんが座っていないからよく覚えている。「スーパープラネット」は3号機で、当時としては珍しい「大量リーチ目」が搭載されており右リール枠上7を筆頭に数多くのマニアクなリーチ目があつた。当時は告知ランプの類など付いていない台がほ

んどだったので、ボーナス成立最近まで現役で稼働中の機種だったからである(名称と筐体と小役構成には若干の変化はあるが、リーチ目等のゲーム性にはほぼ変化はない)。実はこの機種、初めて市場に登場してから10年以上経過してもホールに設置されていた超ヒット機種で、販売台数においても北斗の拳・吉宗が登場するまで、長きにわたってトップに君臨し続けてきた回胴界における大御所なのである。そして私が始めて打った台もその名機だったのである。

A氏プロフィール

三重県出身。三重の高校を卒業後、進学のため大阪へ。学業よりもパチスロに専念してしまってお決まりコースの大学中退。中退後3年間はパチスロで生計を立てる。その後サラリーマンになるも副収入はパチスロで。結婚のため三重に戻りホール店員となる。現在は知識と経験を生かし某店で設定師として手腕を振るっている。目押しレベルはスイカの種まで直視できるほどの異常っぷり。



「惑星にしようか、カエルにしようか……」人が打っているのだから面白い台なのだろうと勝手に決めていた私は、おばさんたちが遊技中の2機種のどちらにするか迷っていた。結果、見た目もキレイでまだ新しくあった「カエルの台」を打つことに決めた。20台ほどある「カエルの台」の端から4番目に着席。適当に選んだのを今でもハッキリと覚えている。当時、データ表示機が導入されていた店舗は限られておりM店にはデータ表示機の類は皆無だった。データ表示機があったとしても判断する術を持ち合わせていない私にとっては同じ結果だったかも知れないが……

着席したまでにはいいが、遊技方法が全く分からない。パチンコなら台の横に100円500円硬貨を入れるところがあり、玉が

借りられる仕組みになっているが、それがスロットには無かったのである(正確にはメダルサントというものは既に普及していたが、M店には導入されていなかった)。周りに初心者なのを助けられないようにしながら回りをキョロキョロ、ホールをウロウロ。お？それはスロット島の片隅にあった。「メダル貸機・1枚20円」、さらに千円専用……。高！パチンコ玉が100円から借りられる事を考えると、かなり割高。しかしメダルを借りなければ遊技できない事くらい私にも理解できる。仕方なく私は機械に夏目漱石を投入。ジャラジャラとゲームセンタ

ホールの楽屋裏 其の1

第1回目は今回は今人気の「秘宝伝」について少々触れたいと思います。みなさんはこの機種の設定状況をどのように考えているのでしょうか？最近の台では珍しく、BIG中のハズレやスイカの確率、通常時のチャンス目出現率、高確移行率などで比較的設定の良し悪しが判断しやすい機種とされています。しかし実際はスロットを熟知しており、いつも勝つて行くようなお客様でも、平気で6を捨てていくことがよくあります。4・5に閉じ込められているハズレはアップします。BIG中のハズレとスイカの出現回数をカウントしているにもかかわらず、6を捨てたりするのは私にもわかりません。6を捨ててみたり、5にして

す。6でもハズレなら1回のビッグで4回5回出ることも多々ありました。しかしスイカに関しては参考になる程度の出現率に落ち着いていました。ハズレの出現回数よりスイカの出現回数で感じですね。もう一つの判別材料のチャンス目関連の事ですが、はつきり言ってお知らせはほぼ当てになりません……

打つてみたりしましたが、BIG中のハズレにはかなりの偏りがあるように思っています。

設定が使用されている機種でもあり、私にはよく打ちますが、それなりのものは得ています。



これらの事は私が実際に設定を入れて、それを観戦したり、自分で打つたりして思ったことなので、スロットは確率だ！って言う人には理解できないかも知れませんが、しかしそういう人こそ6を捨てて隣の低設定に移動したり……。結果として、高設定が捨てられる確率はかなり高い機種といえるのは事実です。そしてみなさんが思っているよりも高設定が使用されている機種もあると思います。私はプライベートでも「秘宝伝」をよく打ちますが、それなりのものは得ています。